『羊と鋼の森』を読んで

三木市立三木東中学校　三年　小林美優菜

初めてこの本を手に取った時、タイトルの不思議さに目を奪われた。読み始めるとピアノの調律の話だと分かった。私は幼い頃からピアノを習っていて調律の現場に立ち会ったこともあるので、自分のピアノの音色を思い浮かべながら読み進めることができた。

主人公の外村は、高校生の時に偶然調律師の板鳥と出会って以来、調律の仕事に惹かれていく。念願の調律師として働き始めるが、ただ「音を合わせる」だけが調律ではないことを学び、悩み苦悩しながら成長していく物語である。

消極的で真面目な外村は、真摯に仕事に取り組む。先輩である板鳥や柳に、

「板鳥さんは、どんな音を目指していますか。」

「調律がうまくいかなかったらどうしようかと、怖くなることはありませんでしたか。」

と聞いたり自分の思いを伝えたりし、まっすぐにぶつかっていく。普段は決して積極的というわけではないが、こと調律に関しては、真正面から向き合い、自分自身と戦っている。「一生懸命」なんて簡単な言葉では表すことができない。外村を見ていると、そんな感覚を持ってしまう。

自分はどうだろう。目の前のことに、真正面から向き合っているだろうか。私はあまりこつこつと物事に取り組む性格ではない。嫌になったらすぐにやめたくなることが多い。それでもいろいろと続けてきたのは、「周りが言うから。」と仕方なしにやってきたからだ。そう自覚しながらも、それでいいと開き直っているところが自分で嫌になる。両親から指摘されることもよくある。その時は、うるさいなあと思うけれど、後でよく考えたら、大体のことは根本のところは似たようなことばかりだ。

調律は、その人がどんな音を求めているかを理解することが大切だという。調律師になったばかりの外村は、お客さんを満足させられなくて、次回の調律をキャンセルされたりやり直しを命じられたりする。

「こんなのが続いたら私だったら嫌になるだろうな。」

「外村って、よくがまんしているな。」

と、思わず口から出そうになった。

調律がうまくできずに悩むシーンが何ページも続いていく。でも外村は決して諦めない。そんなに嫌ならやめたらいいのに。やってもうまくいかないことが続いているのに。うまくいっていることの方が少ないのに。私が自覚する自分の治したいところにずっと向き合っている気がして、読むのがしんどいと感じた時もあった。

外村の周りの人々の言葉も素敵だ。

「この仕事に、正しいかどうかという基準はありません。正しいという言葉には気を付けた方がいい。」

「こつこつを守って、こつこつとヒット・エンド・ランを狙ってはだめなんです。」

先輩たちのこの言葉は、機械のように「正しい音」を作っていくことだけが調律ではないということだ。そして、それは一気にできるものではない。少しずつ少しずつ。一歩ずつ一歩ずつ。時には失敗もしながら、でも真剣に向き合っていく。ぶつかっていく。

外村のことを、「嫌なこともがまんしている」と捉えていた。でもそれは間違いだったと気づいた。外村はがまんしていたのではない。うまくいかない時に嫌だと感じるのではなく、次はうまくいくためにどうすればいいかと悩んでいたんだ。そして、その悩みは決して後ろ向きな感情ではなく、今よりもいい音に出会ったりお客さんに喜んでもらいたいとねがったりする前向きで素敵な感情だった。

もしかしたら、私のいう「うまくいく」という感覚も、もし外村に聞くことができるなら、

「それはちょっと違うよ。」

と言われてしまうのかもしれない。うまくいくって何？悩むことは当たり前。お客さんの思いを汲み取って、仕事に真剣に向き合うこと。それだけのことだよ、と言われてしまいそうな気がする。「うまくいく」でまとめないで、

とも。

私にないものを多く持っている外村。それを、うらやましいな、だけで終わらせたくない。悩みながら、でも諦めずに向き合ったからこそ、外村は成長できた。考え方。物事への向き合い方。人との関わり方。外村から学ぶことはたくさんある。

私も成長したい。こつこつと取り組むこと。諦めないこと。真正面から向き合うこと。嫌だな、で終わるのではなく、どうすればいいか真剣に悩むこと。外村も、はじめは消極的な高校生だった。でも勇気を出して、一歩を踏み出した。大丈夫、私にもできる。今までの私をきっと変えられる。